Ⅲ　出土遺物の報告

1．　瓦類

57年度の調査によって，軒丸瓦644点，軒平瓦384点，面戸瓦12点，熨斗瓦４点，鬼瓦46点，鴟尾４点，および丸瓦・平瓦・塼が多数出土した。軒瓦の内訳は巻末に一覧表で示した。出土瓦類の年代は飛鳥時代から近世にわたるが，ここでは，７世紀前半に属する２つの遺構から出土した瓦類と，法隆寺ではじめて出土をみた新型式の軒丸瓦２種，軒平瓦１種に限って紹介する。

A　溝ＳＤ3560出土瓦類

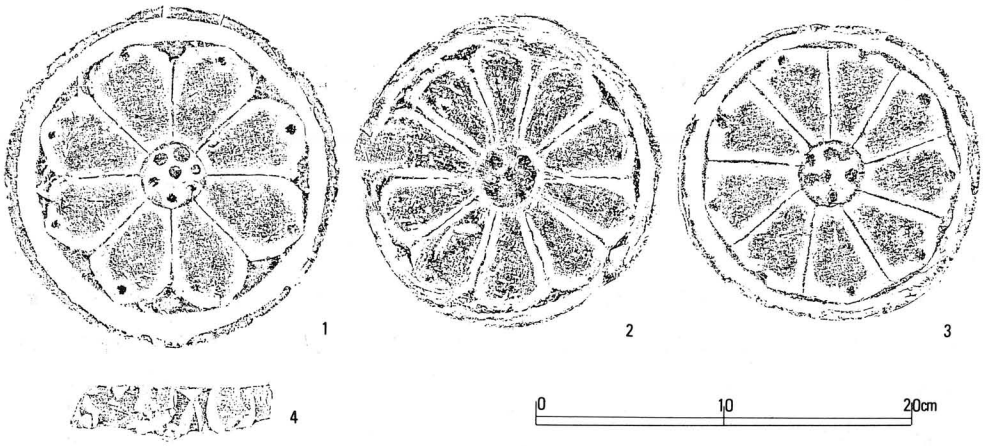
西院地区の第250トレンチで検出した溝ＳＤ3560の埋土から，多量の瓦類が出土した。埋土のうち下層の褐灰粘土層と青灰粘土層で出土した瓦は，層位を異にして18㎝離れた破片が接合するなど同一個体を包含していること，同笵軒瓦が両層で発見されたことから，これらの２層から出土した瓦類を一括して扱うことにする。軒丸瓦８点，軒平瓦１点，丸瓦・平瓦多数，および鴟尾２点がある。

軒丸瓦　２型式３種ある（第64図１～３）。(1)は４Ａ型式[1]の単弁８弁蓮華文軒丸瓦で，四天王寺に同笵品[2]がある。３点出土した。いずれも硬質で，青灰色を呈す。(2)は４Ｃ型式の単弁10弁蓮華文軒丸瓦で，１点出土した。この資料によって，中房の蓮子が１＋４であることがはじめて明らかになった。比較的軟質で，淡褐色を呈す。(3)は３Ｂ型式の単弁９弁蓮華文軒丸瓦で，４点出土した。丸瓦の接合位置が図示した例より時計方向に90度ずれたものがある。いずれも硬質で，灰色か青灰色を呈す。

軒平瓦　114Ａ型式が１点出土した。33Ａ型式の尖端５葉パルメットを配した軒丸瓦の笵を瓦当面に押捺したもので，本例は少なくとも４度押捺している。硬質で，青灰色を呈す。

丸瓦　行基丸瓦と玉縁丸瓦の２種がある。種別を決定できた破片について，各部位の最終調整別に点数を表わした(第２表，110ページ)。また，玉縁の凸・凹面に横方向のナデ調整を施した実例が多いなかで，玉縁凹面に布目がつくものが１点だけある。なお，凸面の調整法で，ハケメ調整とナデ調整を識別できない例が多いので，表においては両者をあわせてナデツケ調整と総称する。

平瓦　各部位の最終調整の組合せによって，３群に分類できる。(A)　側面は不調整で分割截線を残す。端面は横方向のナデ調整，凸面は縦方向の条線の細かいナデツケ調整を施す。側面に，分割する際目安にしたと思われる分割突起の圧痕をとどめる例がある[3]。(B)　側面はヘラケズリ調整，端面は横方向のナデ調整，凸面は縦方向，または横方向のナデツケ調整を施す。凸面の叩き目には格子叩き目（第65図１）と花形叩き目（第65図３）がある。また，凸面に条線のきわめて粗い横方向のハケメ調整をおこなうものがある。(C)　側面と端面にヘラケズ



第64図　ＳＤ3560出土の軒瓦

リ調整による面取り，凸面に横方向のナデツケ調整をおこなう。凹面は各群ともに，布目を部分的に消去した程度の調整が多い。

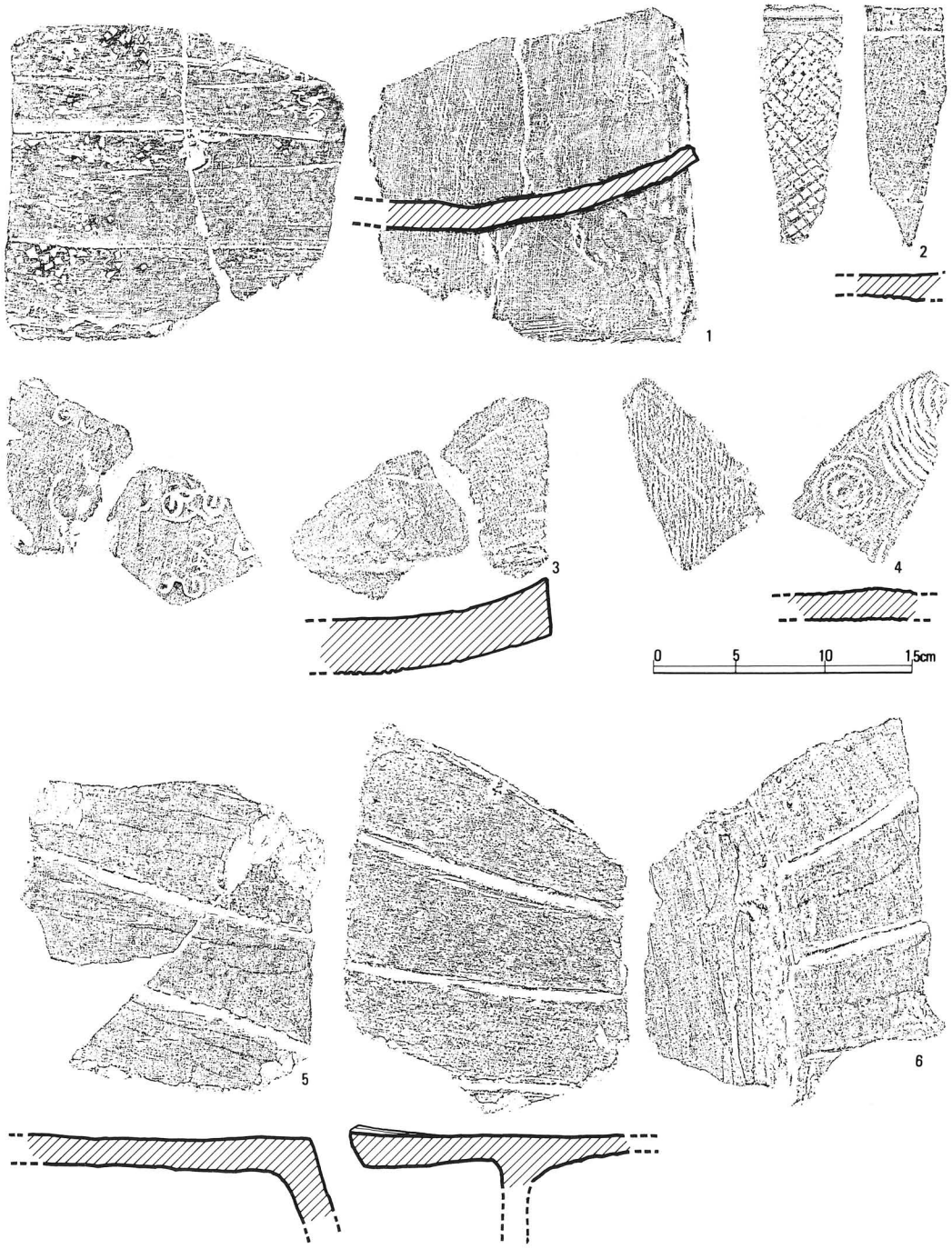
完形の資料がないので，１つの破片で側面と端面をもつもの，および側面だけをもつものを加えて，各群ごとに点数を示せば，第２表になる。当溝においてはＡ群が主体を占める。なお，この他に凸面がハケメ調整で，凹面に同心円叩き目をもつ例（第65図４）がある。側面・端面の調整法は明らかでない。

鴟尾　段型をもつ２点が出土した（第65図５・６）。色調から別個体と思われる。(5)は左側頭部から胴部にかかる破片である。胴部外面にのみ，正段型をけずり出す。頭部外面と内面はナデ調整。硬質で，灰色を呈す。(6)は左側面鰭部と腹部にかかる頂部にちかい部分の破片である。外面と鰭部内面にのみけずり出した正段型をもつ。端面は斜めで，ヘラケズリ調整を施す。硬質で，暗灰色を呈す。

Ｂ　土壙ＳＫ3565出土瓦

第254トレンチは，第250トレンチの西辺で北にのばした拡張区であり，土壙ＳＫ3565はその北東の壁にかかっている。切りあい関係からみて，ＳＤ3560より新しい。この土壙から，軒丸瓦４点，丸瓦１点が一括して出土した（第66図）。

(1)は４Ｃ型式の単弁蓮華文軒丸瓦で，行基丸瓦がとりつく。瓦当部下半を欠く。裏面は回転を利用したナデ調整を施す。側面は丁寧にヘラケズリをし，凹面側に面取りをおこなう。端面にも凹面側に面取りをする。凸面は縦方向のナデツケ調整があるが，凹面は粘土板接合痕，布目痕をとどめ，調整していない。瓦当面から19.3cmの位置に釘穴があく。比較的軟質で，淡褐色を呈す。(2)は３Ｂ型式の単弁９弁蓮華文軒丸瓦である。丸瓦部は玉縁式である。側面は丁寧にヘラケズリをおこなった後，凹面側に面取りをする。凸面は縦方向にナデツケ調整をし，横方向のナデツケ調整をかさねる。凹面は縦方向の粗いナデツケ調整で布目を部分的に消し去る。玉縁には丁寧な横方向のナデ調整をおこない，凹面基部に横方向のヘラケズリ



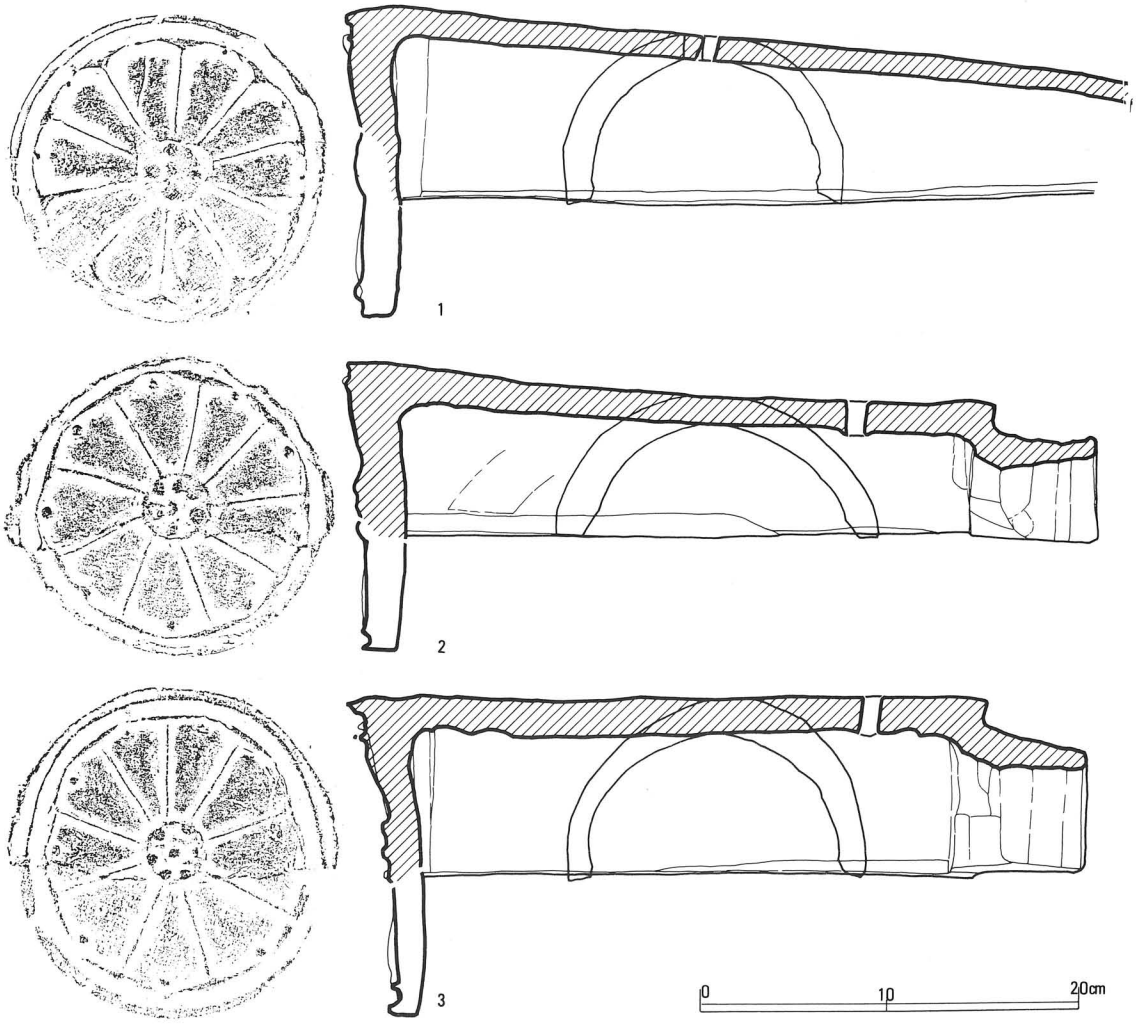
第65図　ＳＤ3560埋土出土の平瓦と鴟尾

調整をおこなう。釘穴が瓦当面から26.5cmの位置にある。硬質で，灰色を呈す。(3)は３Ｃ型式の単弁９弁蓮華文軒丸瓦で，玉縁丸瓦がとりつく。丸瓦部の調整法は(2)とほぼ同じである。瓦当部から27.3cmの位置に釘穴があく。比較的軟質で，灰色を呈す。なお，他の軒丸瓦１点は玉縁丸瓦がとりつくが，瓦当面が欠落している。丸瓦は玉縁をもつものである。

Ｃ　法隆寺新型式（第67図１～３）

(1)は単弁８弁蓮華文軒丸瓦である。突出した中房に小振りの蓮子を１＋６配す。中房のまわりに溝がめぐる。弁端は丸みをもち，珠点をおく。文様構成は４Ｃ型式に近似するので，４型式の新種と認めたい。４型式の年代から７世紀前半に属すとみられる。第213トレンチと第214トレンチで各１点ずつ出土した。

(2)は単弁８弁蓮華文軒丸瓦である。中ぶくらみの突出した中房に蓮子を1＋8配す。中房



第66図　ＳＫ3565出土の軒丸瓦

から蓮弁にむかって，針状の子葉が走る。間弁は大きく，外区内縁に線鋸歯文をめぐらす。22A型式にちかい特徴を有するので，22型式の新種とする。22A型式の年代[4]から7世紀後半に属すとみられる。第214トレンチで1点出土した。

(3)は左偏向の変形忍冬唐草文軒平瓦である。外区に珠文を配す。平城宮6625A型式にあたり，同笵資料が奈良市押熊町押熊瓦窯で出土した[5]。窯の操業年代からみて，8世紀後半に属すと思われる。第225トレンチで1点出土した。

注

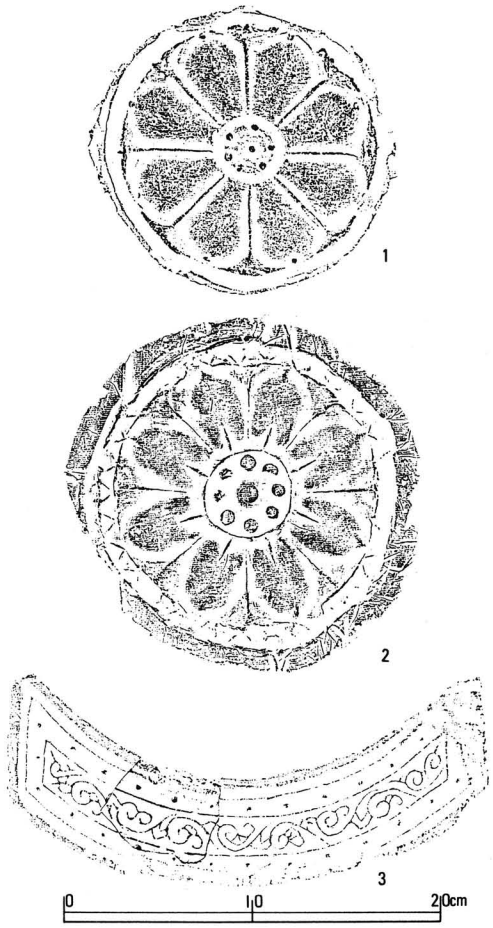
1）奈良国立文化財研究所『南都七大寺出土軒瓦型式一覧(1)　法隆寺』昭和58年。

2）四天王寺『四天王寺図録　古瓦編』昭和11年。

3）滝本正志氏の御教示による。

4）石田茂作「法隆寺の古瓦」『秘寶法隆寺下』昭和45年

5）奈良県教育委員会『奈良山――平城ニュータウン予定地内遺跡調査概報』昭和48年。



第67図　あらたに出土した軒瓦

		点数	比率(%)	側面			端面			凸面			凹面		
				不調整	ヘラケズリ	面取り	横ナデツケ	ヘラケズリ	面取り	縦ナデツケ	横ナデツケ	ヘラケズリ	不調整	縦ナデツケ	ヘラケズリ
丸瓦	行基	5	26.3	1		4	4			4	1		1	4	
	玉緑	14	73.7		2	12	6			1	13		8	6	
平瓦	A群	65 (145)	75.6 (78.4)	65 (145)			65			65 (145)			3 (11)	59 (127)	3 (4)
	B群	9 (24)	10.4 (13.0)		9 (24)		9			5 (12)	4 (11)	(1)	(3)	8 (19)	1 (2)
	C群	12 (16)	14.0 (8.6)			12 (16)			12		12 (16)		5 (7)	7 (9)	

第2表　SD3560出土の丸瓦と平瓦　(　)内は側面のみの破片を加えた数値

2．土器類

昭和57年度の調査で出土した土器類の量はさほど多いものではない。しかしながら，東大門と西大門を結ぶ参道上，鏡池南方の第250トレンチを主として，法隆寺の創建期に関わる6世紀末～7世紀前半期の良好な資料を得るなど，重要な成果をあげることができた。第250トレンチで検出した2条の南北大溝ＳＤ2140・3560，及び西側の大溝ＳＤ3560内で検出した土壙ＳＫ3565の出土土器は，既に遺構の項でも述べたように，若草伽藍の北・西辺を画する掘立柱柵ＳＡ4850・3555との関連から，若草伽藍の造営時期についての有力な手がかりを与えるものである。今回は，この第250トレンチ出土の土器を中心に，6世紀末～7世紀前半期の資料をまとめて報告し，あわせて，小形木彫仏像を伴出した。東院回廊の東の第2036トレンチの井戸ＳＥ2590の出土土器の概要を報告する。

なお，鏡池西南の第251トレンチ区で発見された和同銭・金箔などの地鎮具を収めた土師器椀（2個体）については別項を参照されたい。

A　ＳＫ3561出土土器（第68図第1・2，4～9・17・24～26・28）

土壙ＳＫ3561は第250トレンチの南北大溝ＳＤ3560の溝内西岸寄りの堆積土中で検出した塵芥処理用の土壙である。灰色粘土の埋土中から，完形の土師器杯C(1)やほぼ完形に復原できる土師器鉢B(5)・甕C（8・9）を始めとする多量の土器が出土した。出土土器は，土師器・須恵器ともに7世紀前半期（第2四半期頃）に限られている。土師器杯CⅡ(1)は口径11.7cm，器高3.9cm。底部外面不調整で，内面にラセン状暗文・方射状暗文（以下ラセン文・方射状文）をもつ。杯CⅠ(2)は口径16.7cm，器高4.9cm。底部外面ヘラ削り，口縁部外面ヘラ磨き。ラセン文・方射状文をもつ。鉢A(6)は口径20.7cm，器高10.6cm。底部外面ヘラ削りで，口縁部外面を丁寧にヘラ磨きし，ラセン文・2段方射状文をもつ。鉢B（4・5）は口径34.4cm，器高10.5cm，及び口径29.2cm，器高9.2cm。いずれも底部外面ヘラ削りで，口縁部外面をヘラ磨きし，内面にラセン文・方射状文をもつ。5は口縁部内面を横方向にヘラ磨きするが，4の口縁部内面は器面の風化が著しく暗文・ヘラ磨きの存否不明。杯C(1)から鉢A(6)まで色調は赤褐色，胎土は精良で，平城宮Ⅰ群土器に共通する。甕C（8・9）は口径24.4cm，器高38.4cm，及び口径23.4cm，器高38.5cmで，ほぼ同形同大。体部外面縦ハケ目，内面横ハケ目調整で，口縁部内外面をヨコナデして仕上げるが，8は体部内面下端から底部内面のハケ目調整を省略して，成形時の凹凸を残す。また口縁部の形態にもわずかな差があり，8は口縁部端面に沈線1条をめぐらし，9はヨコナデにより口縁端部を上方に突出させておさめる。黄灰色の特徴ある胎土・色調は8・9と一致する。鍔甕(7)は口径22.0cm。同個体とみられる体部～底部の破片が多数あり，8・9同様ほぼその原形に復原できるものと考えられるが，破面の磨耗のため実際の復原は困難であり，口縁部～頸部のみ図示したものである。体部外面縦ハケ目調整で，内面は成形時の凹凸をそのまま残す。口縁部内面を横ハケ目調整の後，

内外面をヨコナデして仕上げる。色調は暗茶褐色。胎土に多量の黒雲母を含む。いわゆる「生駒西麓」の土器である。

須恵器には杯G蓋・平瓶・𤮋・細頸壺・広口壺の他，甕類の体部破片がある。杯G蓋(17)は径10.6cm，口径7.8cm，器高3.5cm。頂部上面カキメ調整で，宝珠形の鈕をもつ。小形の平瓶(23)は体部径15.7cm。底部外面ヘラ削り調整。平瓶(24)は体部径14.6cm。底部外面ヘラ削りで，体部外面はほぼ全面をカキメ調整し，口頸部を接合する。𤮋(25)は体部径8.7cm。肩部に1条，頸部中位に2条の凹線をめぐらす。細頸壺(26)は体部径14.3cm。底部外面ヘラ削りで，体部上半に凹線2条と櫛描波状文をめぐらす。24・25・26の3個体いずれも体部～頸部内面全体に漆が附着しており，体部の破面にも漆の附着が認められる。恐らく漆容器として使用中，破損し廃棄されたものであろう。広口壺(28)は体部径17.6cm。底部外面ヘラ削りで，頸部に凹線1条をめぐらす。体部内外面はロクロナデ調整。体部には径3～6cmのブクがある。

B　SD2140出土土器（第68図，10・12・13・27）

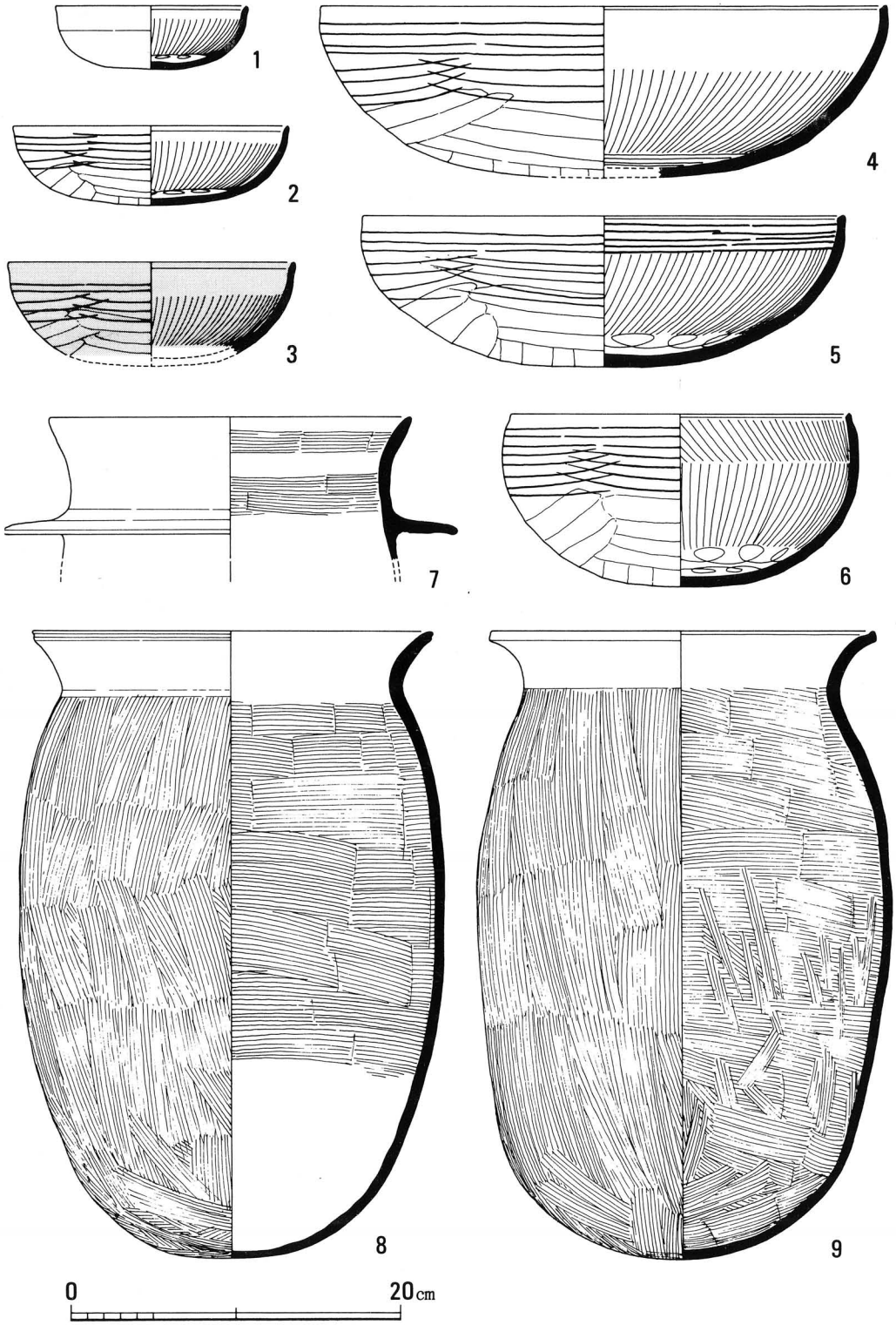
大溝SD2140は第250トレンチで検出した2条の南北河道の中，東側の河道である。若草伽藍西辺の掘立柱塀SA3555の造営に先立って埋め立てられ，排水路の役割を西側に新たに掘られた大溝SD3560にゆずることとなった。出土遺物の大半は造営工事に伴うとみられる木材の削り屑であり，土器の出土量は極くわずかである。須恵器杯H(10)は青灰粘土層出土。径16.4cm，口径13.8cmで底部外面はヘラ削り調整。飛鳥寺下層出土の杯Hに近似し，6世紀後半～末頃のものと考えられる。杯H(12)は溝底の出土。径13.3cm，口径11.1cm，器高3.7cm，底部外面はヘラ削り調整。小墾田宮推定地の溝SD050・124出土例に近似する。6世紀末～7世紀初頭頃か。杯H(13)は灰褐粘土層出土。径12.9cm，口径10.3cm，底部外面はヘラキリのままで，不調整。鉢A(27)はSD3560の上を覆う褐灰粘土層（埋土）から出土したもの。口径23.2cm，器高12.9cm。底部外面ヘラ削り，口縁部外面カキ目調整で，口縁部外面と底部外面に2条1組の凹線文3条をめぐらす。内面は底部から口縁部下半までの広い範囲に及ぶ仕上げナデで平滑に仕上げている。

C　SD3560出土土器（第68図，3，14・16・20～22）

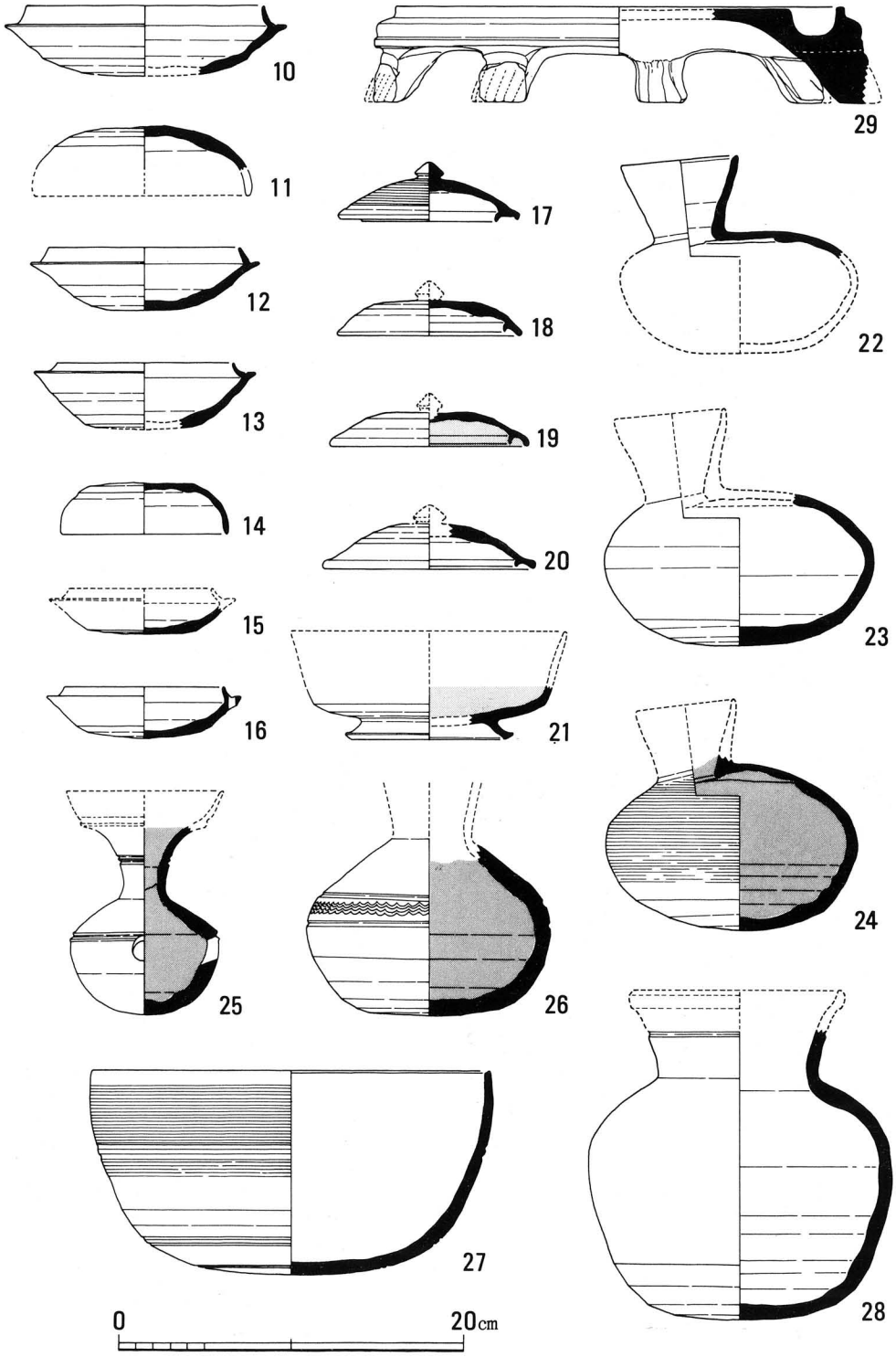
大溝SD3560は若草伽藍の造営に伴って埋めたてられた河道SD2140に代って，その西側に新たに掘られた南北方向の大規模な排水溝である。溝内堆積土，及び堆積土中に掘られた土壙SK3561から7世紀前半代を中心とする多量の土器が出土した。

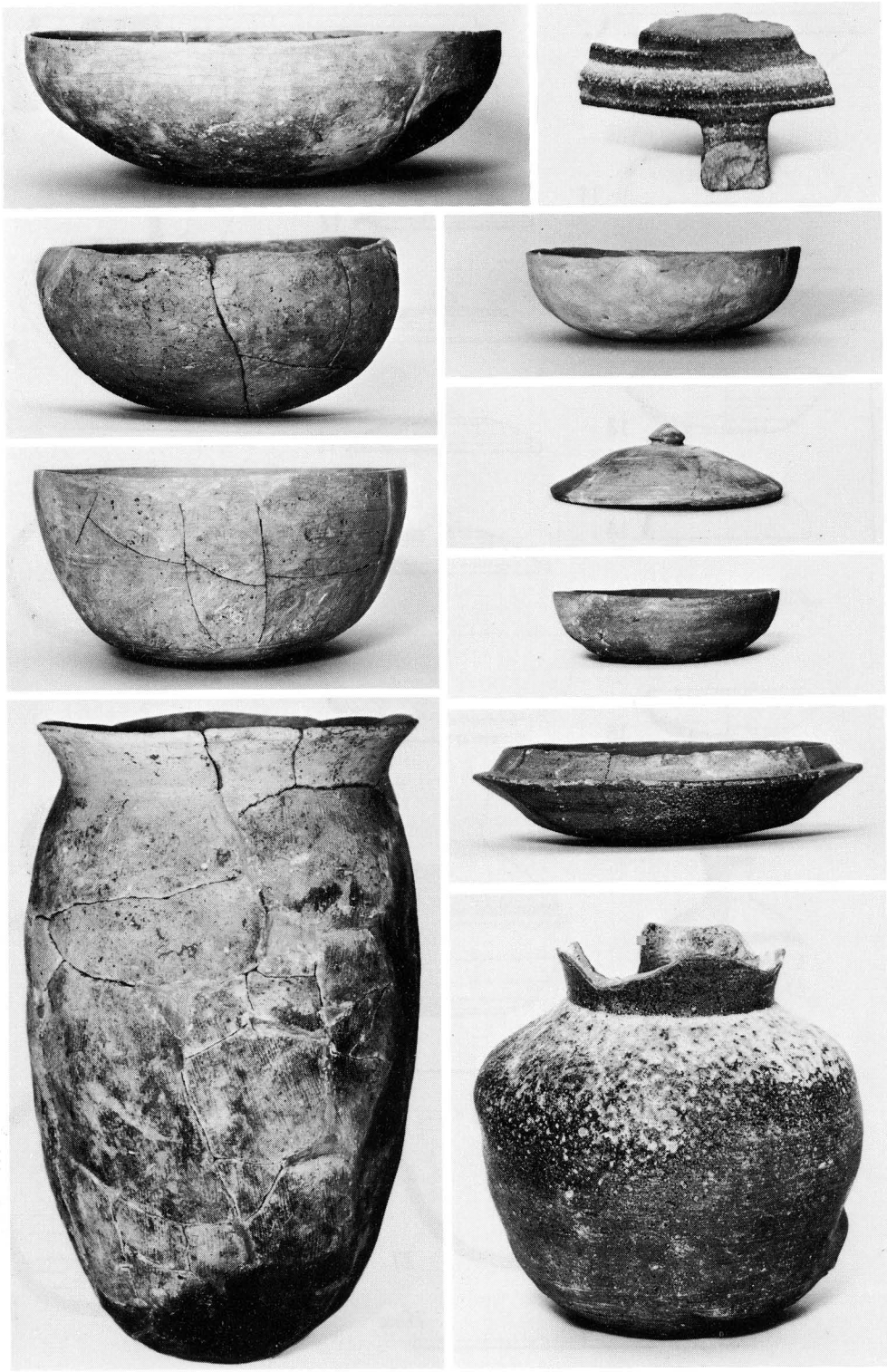
土師器杯C(3)は口径17.4cm，復原高約6.4cm，底部外面ヘラ削りで，口縁部外面を粗くヘラ磨きし，内面に方射状文をもつ。内面と口縁部外面上端には薄く茶褐色の漆を塗っている。炭混り粘土層出土。図示しなかったが，炭混り灰色粘土層からはこの他にも器面に漆を塗った土師器杯C・鉢Bなどの小破片が多数出土している。

須恵器杯H(16)は灰褐砂質土層出土。径11.3cm，口径9.3cm，器高3.0cm。底部外面中央部の



第68図　出土の土師器・須恵器・陶硯(アミ目は漆塗)


10
29
11
17
22
12
18
13
19
14
20
23
15
21
16
24
25
26
27
28
0
20cm



第69図　出土の土師器と須恵器・陶硯

みをヘラ削りし，外周にはヘラキリままの粗面が残る。受部に上下に貫通する径0.4cmの円孔がある。約¼周の破片であり，孔の総数は不明。その用途についても不明である。上層の茶褐色砂質土層からもほぼ同形態の杯Ｈ１点が出土している。杯Ｈ蓋⒁と平瓶㉒は下層の灰褐色粘土層の出土品。14は口径9.6cm，器高3.0cmで頂部外面はヘラキリのままの不調整。22は口径6.7cm。体部の大半を欠く。杯Ｂ㉑，杯Ｇ蓋⑳は上層の茶褐色砂質土層の出土品。21は高台径9.7cm。底部外面をヘラ削りして外方へふんばった高台をつける。仕上げナデで平滑に調整された底部内面と口縁部内面には全面朱が附着し，朱の容器として用いられたことがわかる。20は径12.4cm。頂部上面をヘラ削りして仕上げる。

Ｄ　ＳＫ3570出土土器（第64図，18・19）

土壙ＳＫ3570はＳＫ3561と同じく西側の大溝ＳＤ3560の堆積土中に掘られた塵芥処理用の土壙である。出土土器には２点の須恵器杯Ｇ蓋(18・19)がある。18は径10.8cm，19は径11.6cm。頂部上面ヘラ削り調整。19は頂部内面～口縁部内面の全面に朱が附着する。

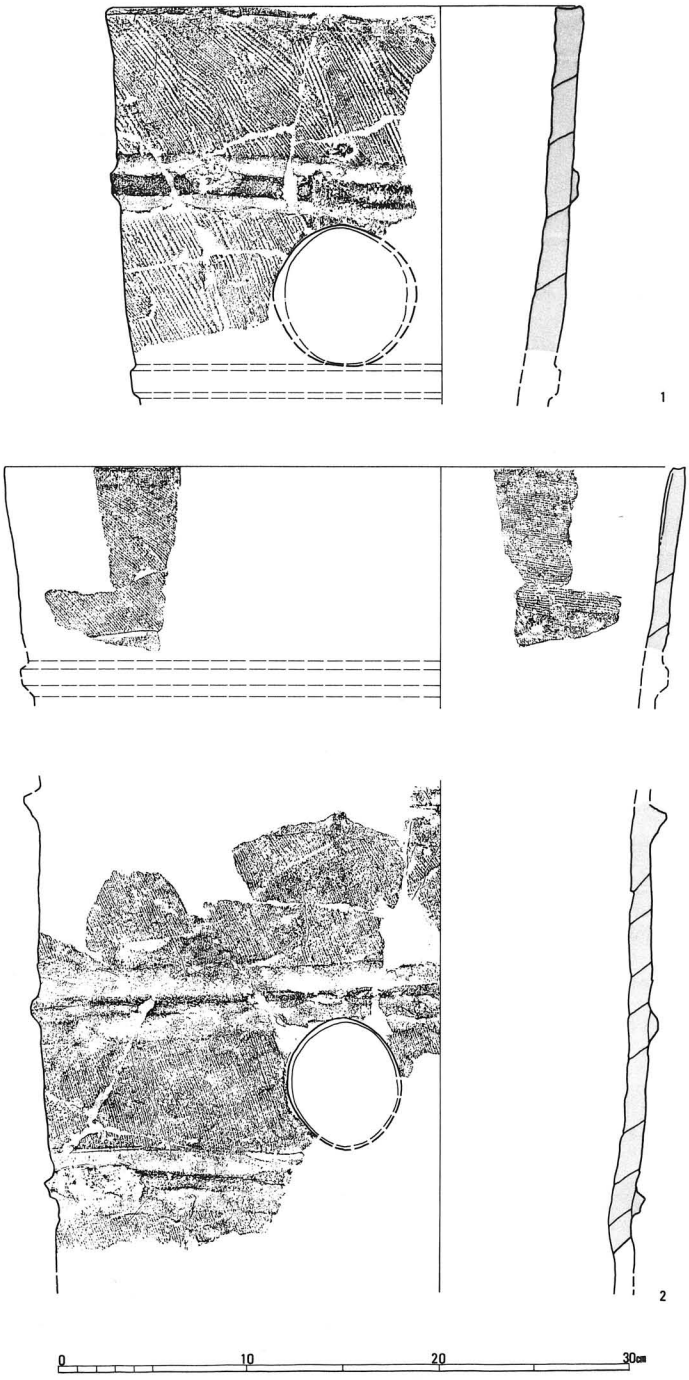
Ｅ　ＳＡ4850北瓦落ち出土土器（第64図，11・15）

鏡池東方で検出した若草伽藍の北辺を画す掘立柱塀ＳＡ4850北側の瓦落ちで，８弁蓮華文軒丸瓦・凸部を板状器具でナデツケ調整洗濯板状整形瓦した平瓦と伴出した須恵器である。杯Ｈと杯Ｈ蓋がある。杯Ｈ蓋⑪は復原口径約12.5cm。頂部上面ヘラ削リ調整。頂部中央部にわずかにヘラキリのままの粗面を残す。杯Ｈ⒂は口縁部～受部を欠くため径・口径ともに不明であるが，底部径から径11.0cm前後に復原できる。底部外面ヘラ削リ調整。

Ｆ　獣脚円面硯（第64図，29）

大宝蔵殿東辺の第213トレンチ南端の瓦敷き面ＳＸ4560で検出したもの。獣脚１個を残す小破片である。硯面の径と脚部の取りつき痕跡から９脚に復原できる。硯部の径28.4cmの大形品である。幅3.0cm，高さ3.0cmの方柱状の脚部側面と前面の一部にヘラ描きの沈線が残り，

第70図　ＳＥ2590の埋土出土の土師器



第71図　ＳＤ3560埋土出土の埴輪

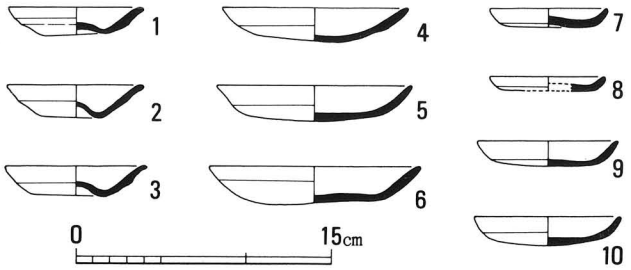
欠損した脚部前面の獣脚の表現が推定できる。暗青灰色，焼成堅緻で，硯面は使用による磨耗が著しい。

G　円筒埴輪（第71図）

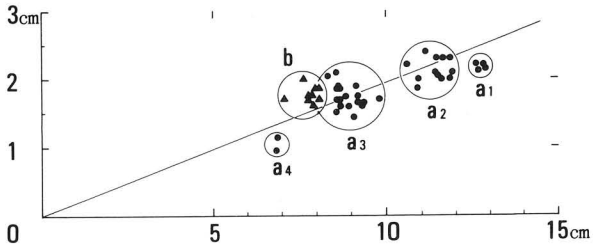
第250トレンチ区の南北大溝ＳＤ3560下層の灰色粘土層及び灰褐色粘土層より，２個体分の円筒埴輪片が出土した。１は上端から２段目タガ部分の直上までを残す約½周の破片で，上端の径25.0㎝。外面を縦ハケ目で調整後，断面台形の扁平なタガをめぐらす。内面はナデ調整のみ。器壁は1.2～1.7㎝でかなり厚い。茶褐色・焼成堅緻で，黒斑はみられない。内面に煤状のものが附着しており，後世に何らかの用途に転用された可能性がある。２・３は同一個体。１と同じく外面縦ハケ目調整，内面ナデ調整であるが，最上段の内面のみ横ハケ目調整を行う。胴部中位の復原径約33㎝で，１に較べやや大形である。胎土・焼成は淡黄白色で，堅くややもろい。

H　ＳＥ2590出土土器（第72図）

井戸ＳＥ2590は東院回廊東側の第204トレンチで検出した井戸。瓦質井戸枠の上から２段目の内部埋土から大量の土師器皿と瓦質鉢の破片数点が出土した。土師器皿はいずれも内面と口縁部外面上端をヨコナデ，底部外面不調整の「かわらけ」様のもので，胎土・色調は黄褐色～淡黄褐色，緻密。焼成もおおむね良好である。平底のもの―a群(4)～(10)と底部が上方へ突出する特徴をもつもの―b群(1)～(3)の２形態があり，また第１表にも明らかなように法量のまとまりから，口径12.6～12.9㎝（平均12.8㎝），器高4.2～4.4㎝（平均4.3㎝）の a_1群，口径10.6～11.9㎝（11.4㎝），器高3.7～4.8㎝（4.3㎝）の a_2群，口径8.4～9.8㎝（8.9㎝），器高2.9～4.2㎝（3.5㎝）の a_3群，口径6.8～6.9㎝（6.9㎝），器高1.9～2.3㎝（2.1㎝）の a_4群と，口径7.1～8.1㎝（7.8㎝），器高3.2～4.0㎝（3.5㎝）のb群の５群に分けることができる。出土個体数は a_1群４個体，a_2群12個体，a_3群21個体，a_4群２個体，b群９個体で，合計48個体が確認できる。この中，最も個体数の多い a_3群の６割強，また次に個体数の多い a_2群の約２割が灯火器として用いられており，b群には灯火器として使用されたものが全く認められない。このことは形態の差がまだその用途とも深い関わりを持っていたことを示すものであろう。時期的には，形態の特徴・法量から，瓦器椀の終末期あるいは瓦器椀終末後の室町時代のものと推定される。a群中に多数の灯火器として使用されたものを含むこと，また



第72図　ＳＥ2590埋土出土の土師器



第１表　出土土師皿法量表

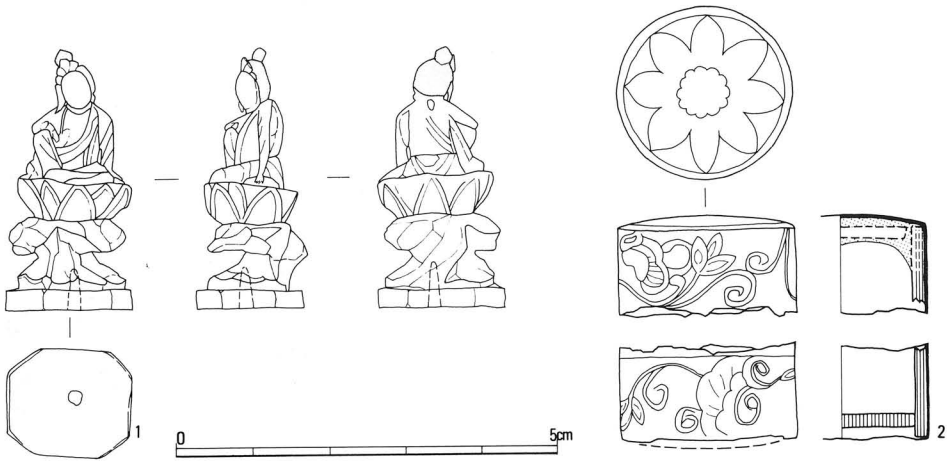
出土土器の半数以上が完全な姿のまま井戸内に埋没していることを考え合わせると，これら一群の土師器皿は，ＳＥ2590の所属する子院において灯火器あるいは供養具として使用された後，井戸の埋没に際し一括して廃棄されたものである可能性が高い。

３．木製品・金属器・地鎮具ほか

Ａ　ＳＥ2590出土品

東院東面回廊東側で検出された室町時代の井戸ＳＥ2590からは，仏像，仏像納入容器，塗香器蓋[1]，銅銭が出土した。

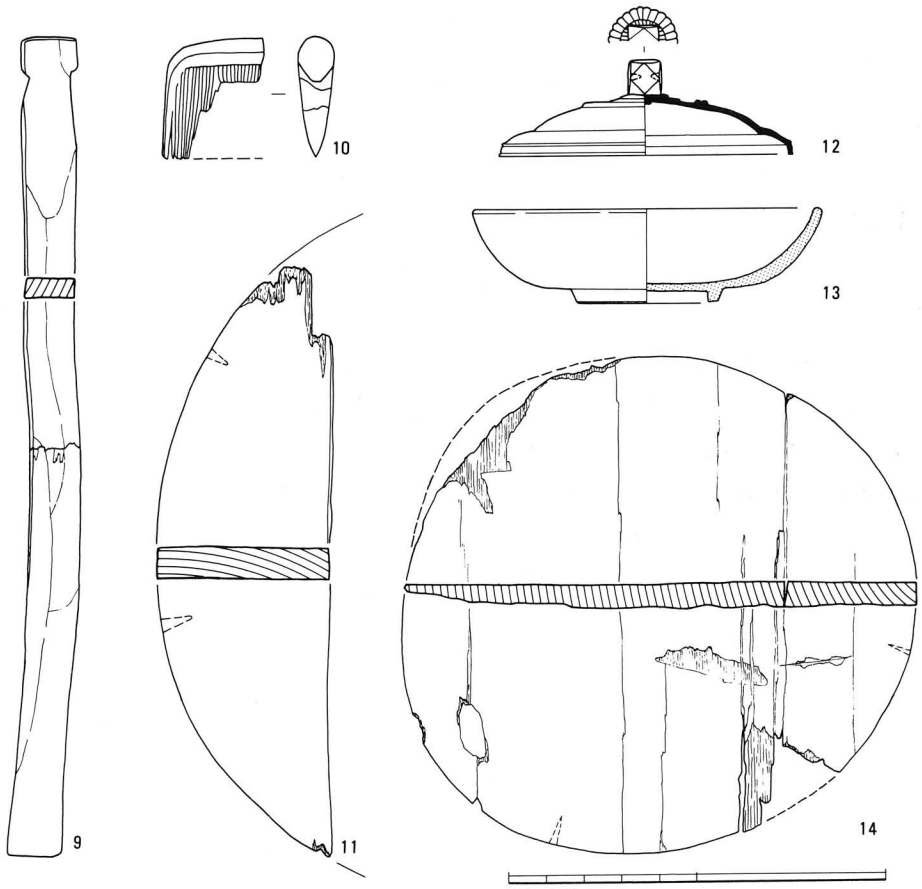
仏像（第73図）　檀像の如意輪観音座像である。頭頂部に髻を結び，髪目はなく墨で塗る。前面額に宝冠をいただく。顔面は作らない。体部には条帛・裳を纏う。本来六臂であるが，左第一手・左第二手・右第三手は肩から先を欠失する。左第三手は台座上下垂下し手指を作る。上膊には衣がかかり襞を刻む。右第一手は肘を膝頭につけ掌を頬に当てるが，肘から手首までを欠失する。右第二手は第一手前面に取り付き屈臂し宝珠を捧げたものと思われるが，肘から先を欠失する。右第三手は第一手背面に取りつき台座上に垂下する。右足は膝を立てやや外に傾ける。左足は趺座する。光背は現存しないが，肩部背面に小孔があり針金を丸めた円光背をさしこんだものと思われる。蓮華座は六弁の蓮弁にそれぞれ間弁の付くもので，いずれも一重の隅取りがある。岩座は全体を荒く削り正面のみに細かい削りを入れる。框座は木製八角形で，底面中央に径3.5mmの穴があく。全高3.45cm，像高1.80cm，台座高1.65cm，室町時代。



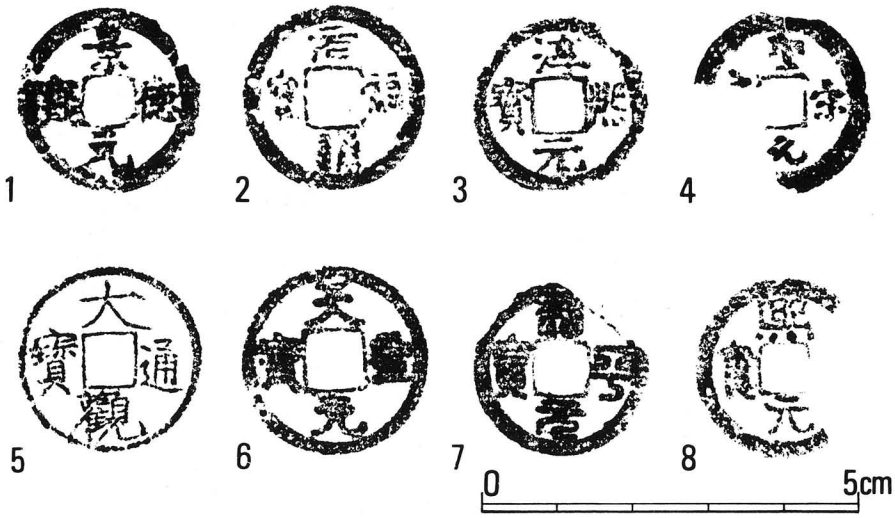
第73図　ＳＥ2590出土の仏像納入容器と仏像

仏像納入容器（第73図）　円筒形で蓋と身に分かれる。いずれも金銅製容器のなかに木製容器をはめこみ，内側に漆を塗布する。蓋は側面に右流れの唐草文，上面に八弁の蓮華文を毛彫する。内面の木製容器は残りが良く，漆を厚く塗り一部木屎漆を用いていると思われる。身の側面にも唐草文を毛彫する。金銅製容器の底面はほとんど欠失し木製容器の底板が露出する。身と蓋の接合部は破損のため不明である。金銅製容器は法量・文様構成よりみて，一対の軸頭金具を転用したものであろう。蓋径2.29cm，蓋高1.47cm，身径2.25cm，身高1.35cm。

塗香器蓋（第74図12）　青銅製の身受の半分を欠失する。鈕は切子面取。鈕孔は両方向から穿孔するが貫通しない。鈕座は二重の菊座となり，鈕座から0.5cm離れて突帯がめぐる。身受に二重の沈線を刻む。塗香器の蓋と思われる。塗香器は密教法具の一種で，灑水器とセットを組み二器と呼ばれる。鋺・蓋・皿よりなり，外面に蓮弁飾を施すものも多い。栃木県輪王寺に類品がある[2)]。鎌倉時代末。径7.70cm，高さ2.21cm。



第74図　出土の塗香器蓋と木製品



第75図　ＳＥ2590出土の銅銭

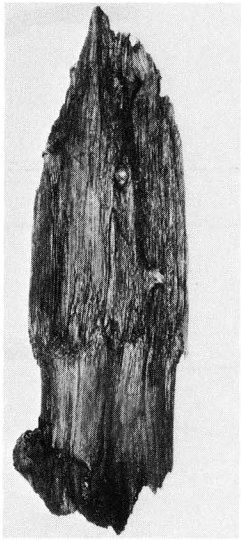
銅銭（第75図）　不明銭１点を除いていずれも中国銭で，５種10枚出土している。景徳元宝（初鋳年　1004年），元祐通宝（1086年），淳熙元宝（1174年），聖宋元宝（1101年）各１枚，大観通宝（1107年）５枚，銭文不明の銅銭１枚。

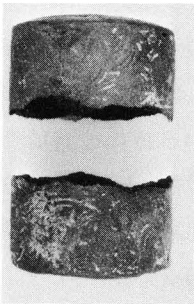
５Ｂ2630出土品

東院西側の善住院跡で検出された平安時代初頭の井戸ＳＥ2630からは横櫛，曲物底板などが出土した。

横櫛（第74図）　鋸で細い歯を挽き出した挽歯の横櫛である。平面形は長方形で肩部が丸くなる。上縁（ムネ）の断面形は丸く半円形を呈する。切通し線はムネにほぼ平行する。歯数は１cm当り９本である。全高3.2cm，歯長2.5cm。イスノキ。

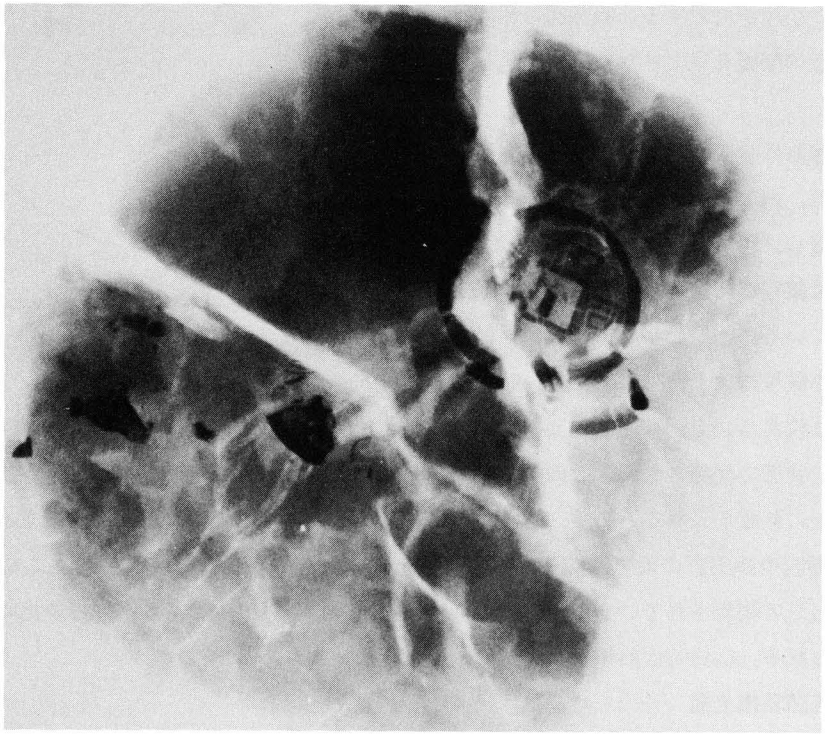
曲物底板（第74図11・14）　11は側面の２ヶ所に木釘痕をとどめる。内面を黒色に塗る。長さ15.6cm，幅4.5cm，厚さ0.85cm，復元径19.8cm。14はほぼ完形であるが破損が著しい。平面形はいびつな円形を呈する。本来３ヶ所にあった木釘痕のうち２ヶ所をとどめる。最大径14.0cm，厚さ0.7cm。ヒノキ。





第76図　ＳＥ2590出土の仏像納入容器と仏像（実大）

第77図　ＳＡ3555の柱根（高さ44cm）

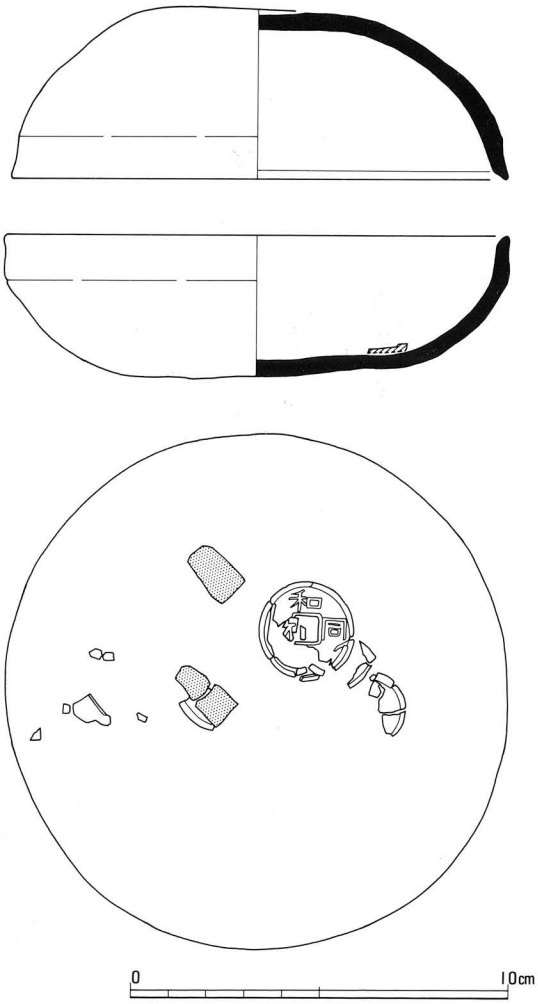


第78図　ＳＫ3600出土の地鎮具（Ｘ線写真）

付札状木製品（第74図９）　細長い柾目材の一端に両側より切り欠きを施している。表面は平滑に削る。形態的には木簡でいう付札と同じであるが墨書は無い。付札として使用するために用意した未使用木簡[3]の可能性がある。長さ21.7cm，幅1.35cm。ヒノキ。

C　ＳＫ3600出土品（口絵カラーページ・第78・79図）

地鎮具　土師器椀Ｃのなかに和銅開称と金箔をおき，別の土師器椀Ｃで蓋をしている。身となる椀の口縁部外面に「大」の墨書がある。和同開称と金箔は大部分が身となる椀内部に流入した土とともに取り上げられている。底部にも１ヶ所和同開称の小片が付着する。第79図は和同開称などの配置を見上げた状態で図化している。



第79図　ＳＫ3600出土の地鎮具

和同開称は少なくとも２個体の存在が確認され，内１個体は取り上げた土の表面に付着し，「和同」「称」の字をとどめる。その他Ｘ線写真によって土中に小破片が散在していることがわかる。椀底部に付着する小破片には「開」の字をとどめる。金箔が２枚ある。上記椀底部内面の和同開称から1.0～1.5cm離れて，同じく椀底部内面にはりついた状態で発見された。この他に１枚，Ｘ線写真によって金箔の存在が推定される。土器のなかに銭貨を入れるもので，何らかの祭祀的な意図がうかがわれる類例としては，東京都多摩蘭坂遺跡出野の須恵器椀・和同開称・万年通宝をあげることができる[4]。この場合は蔵骨器として報告されているが，今回の例は寺院境内からの出土であり，地鎮のためのものと考えられる。奈良時代前半。

D　ＳＡ3555出土品

柱根（第77図）　若草伽藍の西を画する掘立柱柵ＳＡ3555の柱である。遺存状況が悪く，本来の太さをとどめない。下端近くに幅約11cmにわたって，えぐれたように腐蝕した部分がある。筏穴の痕跡と思われる。コウヤマキ。

木材の削り屑　ＳＡ3555造営以前の河道ＳＤ2140から木材加工の際の削り屑が多量に出土した。おおむね，手斧のような大形の工具ではつった際の削り屑である。

E　その他の出土品

その他の遺構や包含層からも，漆器・曲物底板・桶・銅銭・鉄釘・鞴羽口，動物遺体などが出土した。

漆器（第74図13）　高台付小椀。黒色の下地を施した上に黒漆を塗りさらに朱漆を重ねる。復元径9.2cm，高さ2.5cm（第207トレンチ出土）

銅銭（第75図１～８）　天聖通宝（初鋳年　1023年，第222トレンチ出土），治平元宝（1064年，第230トレンチ出土），熙寧元宝（1018，同左）各１点，寛永通宝12点がある。

鞴羽口（第80図）　第213・240トレンチから鞴羽口が出土した。この他，第238・247・250トレンチから鉱滓が出土している。

動物遺体　いずれも四肢骨の破片で，関節部の残存するものはない。骨のリン分と地下水が化合したビビアンナイトの結晶を析出しており保存は悪い。同定できたものは，ウマ（*Eguus caballus Linneus*）の左側上椀骨体部破片である。他に橈骨・脛骨の破片があるが種の同定はできない。（ＳＤ2140出土）。

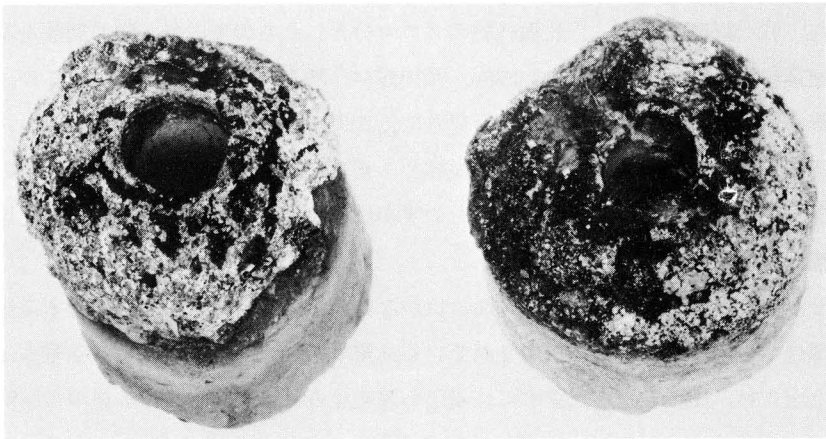
注

1）仏像・仏像納入容器・塗香器蓋については，奈良国立博物館　光森正士氏の御教示による。

2）奈良国立博物館　『密教法具』（昭和40年　講談社）　P130

3）奈良国立文化財研究所　『平城宮発掘調査報告　ＸＩ』（昭和57年）P104，P111，P112

4）国分寺市教育委員会　恋ケ窪遺跡調査会　『多摩蘭坂遺跡』（昭和55年）P116～P121



第80図　第213・240トレンチ出土の鞴口

4　建築部材

善住院から発見された平安時代と見られる１辺約１ｍの井戸の遺構は，内側に横桟を四角に組み合せ，その外側に厚さ４～５㎝の板を隙間なく縦に並べ，四隅に柱を立てた形の井戸枠で，上方は腐朽していた。

この井戸枠組を解体して見ると，横桟と隅柱は，材の断面が八角形で，対辺間の寸法は平均10.6㎝程度の桧材を使用し，チョウナ仕上げとしていた。これらの八本の材を総合して考察すると，化粧垂木と推定される痕跡が三箇所について考えられた。しかし何本かの材を切使いにしていたので，もとの長さについては究明することが出来なかった。

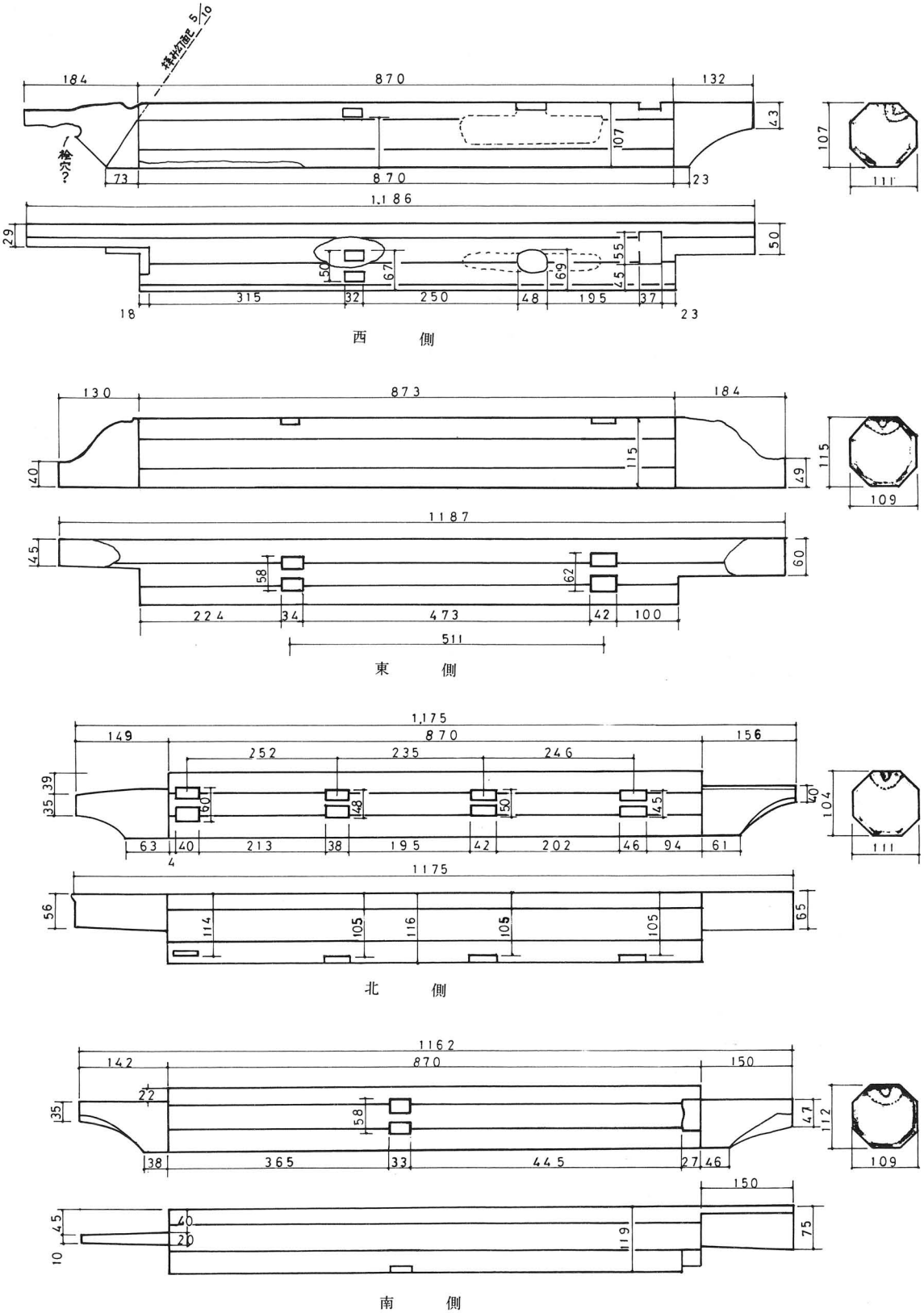
垂木と推定した第１の痕跡は，南西隅柱と北東隅柱に使用されていた部材に残る，垂木の先端の茅負と見られる止釘穴痕の痕跡であり，特に北東隅柱材は，先端より上端14㎝程を0.5㎝程削取って均らし，木口より４㎝位のところに茅負の当りと見られる圧痕があり，茅負幅はほぼ９㎝程度と推定され，止釘穴の痕跡もあり，周囲には風化のあとも窺えた。その他の部分の上端については腐朽のため判然としなかった。しかしこの二本の材は，化粧垂木の先端部としか考えられないものである。

第２の痕跡は,「エツリ」穴で,東南隅柱材と横桟材４丁のすべてに残存していた。「エツリ」穴と云うのは，縄や藤蔓の類で他材としばり合わせるための穴で，木材を筏にして運ぶ時しばりつける穴とも同じである。中央に畔を残し両側より穴をあけ，畔下を穿ち通すもので，上代建築の垂木などには良く見られ，木舞などを編みつけるための穴である。

この「エツリ」穴の残存材５丁の内，北側横桟材の「エツリ」穴の大きさは畔を挟んで幅は4.5～6.2㎝，長さは3.2～4.6㎝あり，穴の間隔は一定ではないが，25㎝前後で，南と東の横桟材も，穴の間隔をのばし，北横桟材の２コマ分としたもので，ほゞ同じ間隔となる。しかし南東隅柱材については間隔は約22㎝，西横桟材は29㎝，33㎝と変則的であるが，垂木を打ってから木舞に合わせ臨機に穿ったと見れば，この穴の間隔の不同も差支えない。

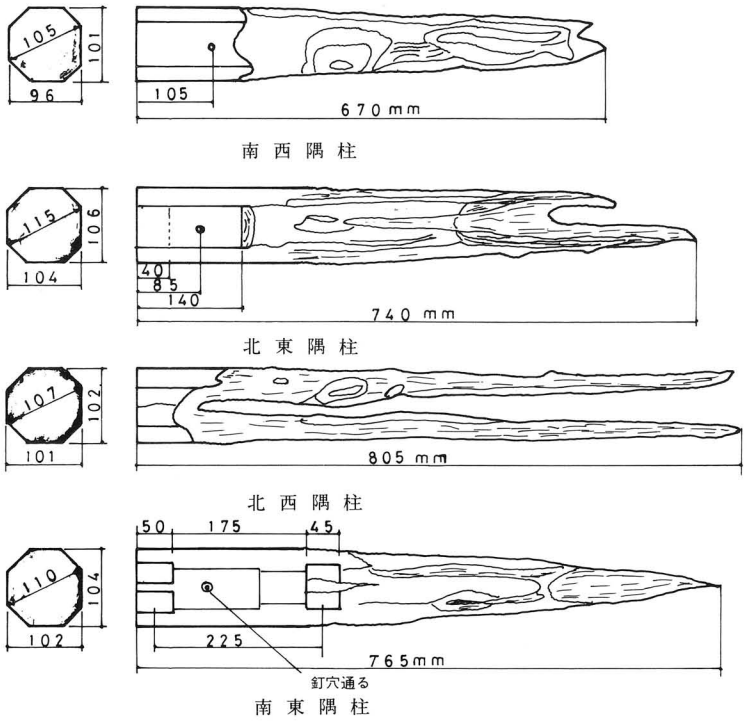
第３の痕跡は，上記西横桟材の端部の痕跡で，それには垂木拝みの３枚枘の組手の雌の部分の半分が残存し，栓穴と見られる痕跡もわずかに見られ，同枘組の痕跡によると勾配は5/10勾配と推定される。

以上３点の根拠によって，垂木と考えるほかないが，法隆寺には八角形の垂木の建物がなく，記録にもない。現在東室に使用されている丸垂木中，当初垂木と見られる垂木の径は12～15㎝と大きい。出土した八角垂木には風化の跡も見られ，丸垂木を作る途中の段階とは考え難い。そのほか八角材では，東院伝法堂の天蓋釣木等が見られるが，「エツリ」穴はなくまた不用でもある。平安時代以前に於て八角形の垂木の使用されていた類例は極めて稀であると思われ，いづれの建物に使用されていたかは見当がつかないが，先端の風化程度より一軒ではないかと見られる。先端部より後方上端がかなり腐朽していたので，軒先が板張りで



第81図　善住院出土の井戸枠材実測図１

あったが，「エツリ」穴があって木舞絡みで，大講堂の様に軒裏を塗上げていたか判然としないが，上方は「エツリ」穴が残存しているので，屋根野地兼用として使用していたと推定される。



第82図　善住院出土の井戸枠材実測図 2

第83図　実相院表門前の石列と瓦溜(東南から)第224トレンチ